

「南岸低気圧による雪(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

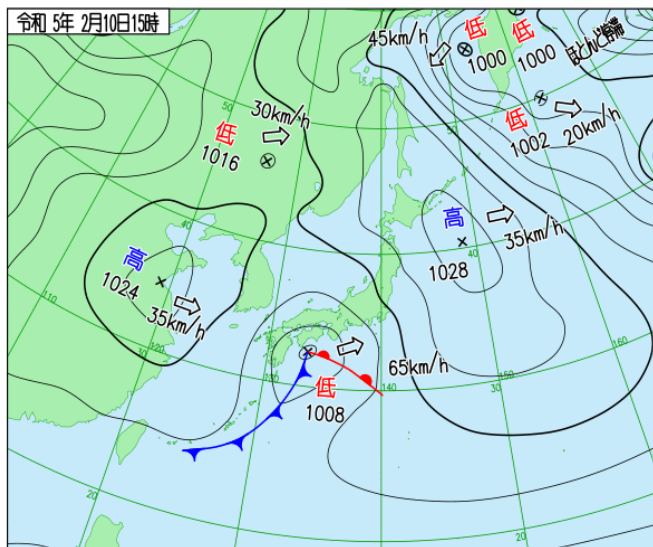
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

東京に雪が降る条件は、およそ2種類しかない。一つは「房総前線」という気象現象で、伊豆半島～房総半島にかけて現れる停滞前線である。



非常に局地的で、出現している時間も短いので、通常の天気図に表示されることは稀で、あまり存在も知られていない。しかし、この前線の北側では雪になることが多く、その範囲に、横浜・千葉・東京などの大都市が含まれている。ただし、房総前線の勢力は弱く、大雪を降らせることはまずない。



もう一つが「南岸低気圧」と「寒気の南下」の組み合わせで、これは南関東だけでなく、関東甲信の広い範囲に大雪をもたらすことがある。今回の低気圧は65km/hと、移動速度が大きく、急に雪が強くなったのが特徴と言える。



2023年2月10日の雪も、南岸低気圧のえいきょうによる降雪だった。東京でも大雪警報が出たが、多くの人が予想していたよりも、大雪にはならなかった。南岸低気圧通過時に、低気圧の右側(東側)を回り込んだ南風で、気温が上昇したことが主な原因だ。



1年生は珍しい雪に大喜びで、さっそく教室の軒下で雪の結晶を観察していた。



雪の結晶の観察方法は単純で、降ってきた雪粒を腕(袖)で受け止めて、融けないうちにそっと観察するだけである。東京では雪の結晶なんか観察できないと思いがちだが、そんなことはない。「樹枝六花」を始め、結構美しい雪の結晶が見られることもある。